

できたのである。

記憶をたどって

和歌山県 神前 恵 一

部隊で衛生兵として勤務し、負傷者の手当てや飲料水補給が勤務の内容ですごしていた。終戦になったことは、八月十五日もだいたい過ぎて、九月始め頃、部隊本部からの使いで知った。

九月十三日ごろ、部隊命令で本部に集合、武装解除となった。場所は鏡伯湖学園屯である。「ダメイ、ヴィステレ！」と自動小銃におびやかされながら、千人単位ほどに集団をつくられた。

食料も、部隊にあったものは全部没収され、わずかな高粱や粟、塩と砂糖少々、時には大豆（豆粕）が主食だった。飢えのために、運搬作業中にたおれる者が出た。

そうしたなかで死の行軍が始まった。行先はどこかは

知らないが、牡丹江に向かってソ連兵にかこまれての行軍である。隊列をりだつする者はかしくなくマンドリン銃で射殺である。戦友のことも考えてみても、いまは自分自身歩行していくのがやっとである。

五、六人ぐらいが射殺されるという行軍のすえ、戦利品である舟艇で牡丹江を渡った。日本に帰る言葉とは逆に、ソ連領へ「スイフン河」を経由してグラコフというこうばくのソ連領地についた。

飢えと夜の寒さがジーンと身にこたえる。入ソ最初に病院勤めを命ぜられたが、衛生一等兵の経験しかないので、カーシア（お粥）の運搬と、毎日死亡する抑留中死没者のしまつで、屍室から凍土に掘られた墓までの運び屋であった。

A、B、Cという具合に幕舎病棟が分けられてあったが、しかばねの始末は毎日三、四十人ぐらいはあったと記憶している。主としてタイセツト地区からの入院患者が死亡者の数では圧倒的に多く、カルテ（病人名、病名、死因等を記したカード）はソ連側しか見ることが許されていないので、どこの誰であるかがわからなかつ

た。ただただ手を合わせて死者の冥福を祈るばかりであった。

夜ともなると狼か野犬のるいであろうか、とおぼえが聞こえ、朝見ると、むざんにも墓が荒らされていた。無情断腸の思いが身体中を走るのだった。

病院では、労働もできない者から順次帰国させるためのチェックが、軍医や政治局員によって始められた。二十二年頃からである。他の收容所からも多数の仲間達がソ連兵や政治局員達に連れられてやってきていた。自分の番はいつの日になるのか、望郷の思いひとしおで、こうした状況をもくして見つめるばかりだった。

タイセットに移って、伐採作業も越年二年日ともなると、従前からの話とはかわって、食糧事情も大分良くなった。洗脳教育も、收容所民主運動というかたちのなかで教育を受けたオルグ達によって始められた。

舞鶴の鳥かげや緑の丘をみたときは、ぼうだたる涙が頬を伝って流れた。二十四年九月二十六日であった。

四十年をさかのぼって

千葉県 関 宗 則

終戦より入ソ

私は昭和十九年五月応召、佐倉に入隊、直ちに満州に。八月ごろより朝鮮の近くのソ満国境警備、山の上のトーチカよりソ連の兵舎、またはるかにポシエツト湾という海も見えました。

二十年六月下旬に西東安に転属。そこで日ソ開戦、直ちに国境の戦場に向かう途中、ソ連戦車を見、三百人近くで小銃のみの部隊、直ちに山に入り、山中を牡丹江へ、奉天へと行軍し、八月三十日ころ、白旗をかかげた通訳よりマイクにて「日本の兵隊さん、戦争は終わりました、武器を捨てて出て来なさい」と呼びかけられ終戦を知り、横道河子にて武装解除となりました。

十月初旬、身体検査があり、やせた人は残され「今、日本は敗戦で何もなく、復興のため身体の丈夫な者だけ